
天泣の聖女

空月 とわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天泣の聖女

【Nコード】

N2500K

【作者名】

空月 とわ

【あらすじ】

”豊穰の都”とも呼ばれている緑豊かなクローク王国に1人の少女が訪れた。無二の親友であるティアに恋人ができたと便りがあり、レイスリーネはさっそくその親友の恋人を見定めに行ったのだが・
・その親友の恋人はなんとクローク王国の第3王子だった。そしてクローク王国は現在王位継承権を巡り王宮内部で第1王子派と第2王子派の対立が目立ちはじめていた・・

天泣

序章

大陸でも有数の大国クローク王国、広大な土地は緑豊かに恵まれ肥えた大地のため”豊穡の都”とも呼ばれている――
そのクローク王国の王都アステリオの要、アステリオ城内にある神殿の一室・・・

「”聖女”である貴女が我が国に滞在して下さる事はとても光栄な事なのですが・・・

貴女の滞在を国王陛下にも隠密にというのは・・・」

アステリオ神殿の神官長ベルゼフは眉を下げながら目の前に座る少女に言葉を濁しながら告げるが

少女はにっこり微笑み・・・

「大丈夫、バレなきゃいいわけですし」

「いや、バレなきゃという問題ではなくてですね・・・

貴女程の方が滞在しているということはさすがに陛下には報告しないと不味いのです」

ベルゼフの言葉に少女はうーんと唸りながら首をかしげ・・・

「私がクローク王国に来た目的は本当に個人的な事で来たんです。だからこうして人払いしてもらったうえに身分を隠して来たんです。たかが個人的なことのために国王陛下に報告するまでもないですし、大ごとにしたくないんです」

「失礼ですが、個人的な事とは・・・？」

「友人にどうやら恋人が出来たらしいんです・・・
その相手をちょっとばかりどんなヤロウ・・・失礼、どんな殿方なのかを見に来たんです」

遠慮がちに問うベルゼフに少女はにっこり笑みを浮かべながら告げる、ベルゼフは少女のその笑みの下に隠れた”私の大事な親友の心を射止めたヤロウはこのどいつだ”と言った雰囲気口元を引きつらせた――

「・・・そ、そうですか」

「ええ、そうなんです。ちなみにひとつ聞いてもいいですか？」

「何でしょう」

「この城内にいる方の名前で、リュカって人に心当たりはありますか？」

「リュカ、ですか？城内には沢山人はいますからね・・・」

手を顎に置き考えるベルゼフに少女は友人からの便りの手紙に触れられていた内容を思い出し、

友人のお相手のリュカという人物以外に出てきた名前を思い出す――

「ええ、と・・・あとはオズ、って方とか確かリュカの友人って人がセツナって名前だったはず・・・」
「・・・」

少女の言葉に何やら思い当たる節が見つかったのかベルゼフは軽く目を見開くと、どこか気まずげに視線をさ迷わせた。

その様子に少女は不審げに見ながら心当たりがあるのかと問うと・・・

「その、オズとセツナという名前と”リュカ”という人物・・・ですが」

言葉を濁らせるベルゼフに少々眉をひそめ、次の言葉を待つ・・・

「リュカと言う方の正式な名前はリュカオン・クロークと言う方で間違いないかと」

リュカオン・クローク・・・ん、クロークって――

「えっ、ちょ!？」

「我がクローク王国の第3王子リュカオン様の事かと。
オズ殿とセツナ殿はリュカオン殿下の側近をされている方々です」

眉を下げ、困った表情を浮かべるベルゼフを凝視したまま固まる少女・・・

「―っ、王子って・・・」

まさかのお相手に戸惑う少女を見ながらベルゼフは思い出す。
ここ最近第3王子と噂になる少女の事を・・・確か宮廷医師のバル

ガス殿が薬草に関して高い知識を持つ娘だと見染め王国の外れの村より連れてきて己の補佐の薬師にした少女だったはずだ――

「まさか王子を射止めるなんて、さすが私の親友ね・・・だけど」

友人としては玉の輿だと喜ぶべきなのだろうが、そうもいかない。相手は身分の高い人物だ、なんせこの国の王子ときた・・・リュカオンという王子かどんな人物なのか見極めなきゃいけない・・・私の大切な親友である彼女を傷つけるような相手なら容赦しない・・・

少女はキラリと目を光らせる――

「ベルゼフ神官長」

「・・・」

「暫くお世話になりますね」

にっこり、意味ありにげほくそ笑む少女にベルゼフは深い溜息をつき頷くしかなかった――

天泣 1

第1話

神官長より滞在許可を得た、というより有無を言わず取ったという言葉が当てはまるがそんな事はまあどうでも良いことだ――

少女、レイスリーネは宮廷庭園にあるベンチにて一休みしていた。

「うーん、評判はいいみたね」

誰の、とは言わずとも我が友の恋のお相手であるクローク王国の第3王子の事だ。

アステリオ城に滞在して5日め、レイスリーネは見習い神官として身分を隠し城内を出歩き、この国の王子の噂を女官や警備兵にさり気に聞いて回った――

ベンチの背もたれに深くもたれかかりながら澄んだ青空を見上げ小難しい表情を浮かべるレイスリーネ

クローク王国第1皇子オルフェルスは神経質で自尊心が高く格下のものを見下す節があるらしい。

王としての器はイマイチらしい・・・王の器に適していると言われているのは第2王子のクラウスだ

沈着冷静で視野が広く家臣たちからの信頼も厚い、一国を背負うものとしての冷酷な一面も持ち合わせているらしいそして、第3王子・・・この王子は家臣たち、特に身分の低い者たちからの支持が高い。気さくな人柄で下々の者にも隔たりなく接する王子――

レイスリーネは盛大に溜息を吐くとベンチから立ち上がった。

「ま、どんな人物かは会ってみないとわかんないよね。

さて、我が親友殿に会いにくかな。来てること知らせてないから驚くだろうな――」

ふふっと笑みを浮かべ彼女がいるだろう場所へと向かったのだった

――

そんな彼女をじっと見ていた人物がいた・・・

「殿下、どうなさいました？」

東塔と西塔を結ぶ通路をちょうど歩いていた第2王子クラウド、彼はふと目に向けた庭園に漆黒の長い髪を持つ少女を目に留めた。スツと目を細める、少女の装いからして神殿所属の神官であることが窺える、だが己の見覚えのある者ではない……

城内に在籍する人物達の顔と名前をほぼ把握しているつもりだ、だがあの少女を見るのは初めてだ――

主の視線を追った側近の一人、フ란ツは1人の少女を目に留めた。

「彼女がどうかしたんですか」

「初めて見る顔だと思ってね」

「……そう、ですか？」

フ란ツは目を瞬かせ、再度少女へと視線を向けながら首をかしげた。

もう一人の側近でるトロワはくすりと笑い……

「殿下は城内にいる人間の顔と名前は全て憶えていらっしゃいますからね、殿下が初めて見る顔ならおそらく新人でしょうね」

穏やかな口調で告げたトロワにフ란ツは成程と頷いた。

クラウドはじっと少女を見定める様に見つめる、そんな彼の横でトロワが……

「調べましかか？」

「……そうだね」

クラウドが軽く頷くとトロワは「心得ました」と告げる。

「疑い過ぎるのはどうかと思うけどね」

失笑するクラウドにフランツは言う。

「仕方無いですよ。なんせオルフェルス殿下のやり方はあまりにも独裁制すぎる。俺はあの方のやり方に――」

「フランツ」

フランツの言葉を遮るように名を呼んだクラウド。

「申し訳ありません、出過ぎた真似を・・・」

「気をつけた方がいい、どこで誰が聞いているかわからなからね」

「はい」

「まあ、俺も兄上のやり方には賛同できないのは確かだけどね」

「殿下っ」

にやりと笑うクラウド、それにトロワが諫めたのだった・・・

「バルガスさん、この薬草はどうしますか？」

「あん、バルガスじゃなくてバルンって呼んでって言うてるでしょ
ティアちゃん」

「・・・あ・・・いや、だって」

「バルン！」

くねっと筋肉質の肉体をくねらせながら男性特有の野太い声音で告げられる言葉の数々に眩暈を感じながらティアは口元を引きつらせ”彼”が希望する「バルン」と言う呼び名を呼んだ。

「バ、バルンさん・・・」

「ふふ、何かしらティアちゃん」

「あいかわらずキモイ喋り方だな、バルガス」

「あらん、リュカ殿下じゃないの！ あいかわらず良い男ね」

語尾にハートマークが飛びまくるような喋り方にドン引きするリュカ。

「んもう、そんな顔しないでよく私の繊細なハートが傷ついちゃう」

宮廷医師バルガス、自称バルン——性別は男。

腕は確かな医師なのだが、この通りオカマなのが難点だったりする。
・・・

リュカは庭先から室内への窓枠に足をかけ室内へと入る。

その様子にバルガスは叱咤する——

「こら、行儀が悪いわよリュカ殿下」

「いいだろ別に、ここにいるのはティアとバルガスしかないんだし」

「もう、悪い子ね」

叱咤しながらも苦笑して許すバルガスに困ったように笑うティア。

そんな彼女を見てリュカは穏やかな眼差しをティアに向け・・・

「バルガス、ティア借りていいか？」

「ふふっ、若いっていいわね。まあ大体の仕事は終わったから良いわよ連れてって」

にっこり笑いティアに行ってらっしやいと手を振ると彼女は戸惑いがちにバルガスとリュカを見る、リュカはそんな彼女の手を取ると入ってきた時と同様に窓枠に足をかけ先に地面に下りる、ティアは戸惑いがちに己に手を伸ばし窓枠をこえる手助けをするリュカの手をかり地面へと着地したのだった。

去ってゆく2人を窓枠から見送りながらバルガスはうつとりとした感じに――・・・

「あぁん、私も甘酸っぱい恋がしたいわぁ・・・あら、お客様ね」

廊下から聞こえる足音に気づいたバルガス。
すぐに扉をノックする音が聞こえ・・・

「はーい、開いているわよー」

「失礼します」

「はいはい、いらっちゃーい。何処が悪いのかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

室内に入ってきた少女はバルガスを見るとあからさまに眉をひそめるとまるで珍獣を見るかのようにバルガスを凝視しているではないか・・・

バルガスはそんな少女などお構いなしに・・・

「あぁん！貴女可愛いわねえ〜お人形さんみたいっ！」

またしてもハートマークが飛び散る程の勢いで告げられた言葉。

バルガスは少女に詰める様に近づこうとしたのだが、少女は思いつき後ずさり壁に張り付き・・・

「うわっ、生オカマ」

と、言ったのだった・・・

「うふ、オカマを見るのは初めてかしら？いやん、可愛い反応っ！」

顔を引きつらせる少女に身体をくねらせ何故かご機嫌のバルガス――バルガスは可愛いものが大好きなのだ、目の前に現れたこの少女はどうやらバルガスの眼には可愛いものとして認識されたようだ・・・

「・・・あ、あの」

「うふ、何かしら？」

「こ、ここにティアって子いますよね」

口元を引きつらせながら問うとバルガスは目を瞬かせ・・・

「ええ、いるわよ」

「私、レイスリーネって言います。ティアとは友人なんですが」

「まあ！ティアちゃんのお友達！あ、残念なんだけどついさっきティアちゃん

リュカ殿下とデートにでちゃった所なの」

「・・・」

リュカ殿下……ね

レイスリーネは「そうですか・・・」と告げて去ろうとしたのだが、がしっと腕を掴まれ己の腕を掴んだ人物を見上げ……

「ああん、せっかくだからお茶していきましようよ。ね？いいですよ」

野太い声で、しかもウィンクつきで言葉をかけられ、レイスリーネは思いつき顔を引きつらせながら全力で拒否した。だってなんかこの人怖いんですけど……

あきらかに外見が鉱山で働く筋肉質の男ってな容貌なうえつぶらな瞳の下まつ毛がやけに長かったりする……

「ね、お茶しましょ。ケーキもあるのよ、モンブランにラズベリーのタルトに、シフォンケーキどれが好きかしら？」

「ケーキ……」

甘いものに目がないレイスリーネは思わずケーキという単語に反応してしまう。

それを見逃さなかったバルガスは……

「ささっ、入ってちょうだい！ケーキは沢山あるから何個でも食べていいのよー」

「！ た、沢山……」

「ええ、たくさ〜んあるわよお」

にっこり微笑むバルガス。

レイスリーネは甘い誘惑に負けてしまい、バルガスの誘いに乗ってしまったのだった・・・

天泣2

第2話

現在私はオカマと楽しくティータイム中です・・・

「っ、美味しいっ！」

ぱくりと口に含んだケーキ、レイスリーネは目を輝かせケーキに夢中になっていた。

そんな彼女を微笑ましげに宮廷医師バルガス（オカマ）が眺めていた――

「ふふ、そんな慌てて食べなくてもケーキは逃げないわよ」

小指を立て優雅に紅茶を飲むバルガスなのだが、なんせその容貌が
鉦山男……

仕草は優雅なのだが、口調と言葉と外見のギャップは凄まじいものがある。

最初のうちびり気味だったレイスリーネだが、徐々に慣れてきたのかあまり気にしなくなってきた。

慣れって恐ろしいな、なんて密かに思いながらもバルガスの人柄の（オカマだけど……）良さにあまり気にしない事にした。

「リーネちゃんはまだこっちに派遣されたばかりの見習いさんなのね」

「はい（ホントは違うんだけどね）」

「大変でしょ、神殿仕えって」

意味ありげな発言にレイスリーネはフォークを咥えたまま顔を上げバルガスを見た。

バルガスは紅茶をかき混ぜながら話したす……

「神殿内部の水面下で勢力争いが起きてるみたいなのよねー」

「勢力、争い？」

バルガスの言葉に眉を潜め神妙な表情になるレイスリーネなのだが、ケーキを食べる手だけは止めない……もぐもぐとケーキを口に含みながらバルガスの話を聞く――

「ええ。この国には王子様が3人いるのは知ってるわよね？」

「はい」

「いずれはリーネちゃんの耳にも入るだろうから話しちゃうけど、

今現在第1王子派と第2王子派の派閥があるの。ぶっちゃけ、私は第2王子派だけどね、だってとーっても素敵なんですものっクラウド殿下って！あん、あの眼差しで見つめられたらくらくらしちゃうっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前で頬を染め恋する乙女のように恥じらう外見鉦山男・・・・視覚的ダメージはかなりのものだ・・・・レイスリーネはさすがに口元を引きつらせそっと視線を逸らしたのだった――

「その勢力争いと2人の王子派とどういった関係が・・・・」

このままだとなかなか話が進まなそうなのでレイスリーネは問いかけた。

「まあ第1王子が次期国王になるのが妥当なんでしょうけど、ぶっちゃけ王としての器を持ってるのは第2王子であるクラウド殿下の方なのよね、武芸にも秀でてらっしゃるし頭もいいし、聡明だし。それに比べてオルフェルス殿下の方は神経質で典型的な王族って感じなのよね、貴族の面子には受けはいいでしょうけど下々の者たちにとっては彼の考え方は受け入れられないでしょうね・・・・国のためって言うより己の為って感じだし。その点クラウド殿下は国のためにとって考えてらっしゃるわ・・・・ま、貴族や家臣たちの間ではどちらが国王に相応しいかってので揉めてるのよ」

「クラウド殿下自身は自分の方が王に相応しいと思ってるんですか？」

「さあ、どうかしらね。その辺り、本人がどう思ってるかはわからないけどクラウド殿下が王座に就きたいって言ったことは一言もないわよ。あの方は頭の言い方だから自分の発言1つでいい方にも悪

い方にも話が進んでしまうつて理解しているから下手な発言はしないわね」

なんとも、複雑な・・・

何処でもそういった政権争いがあるのだなとしみじみと思った――

だがそれと神殿内部の勢力争いとはどう繋がるのだろうか・・・
神殿はどんな事があっても中立の立場を保つのだが――

そのレイスリーネの疑問にバルガスは生クリームをシフォンケーキにたっぷりつけながら話します。

「神殿は今までもどんな事があっても中立の立場を保ってきたの、
だけどね。」

一ヶ月ほどまえにオルフェルス殿下が婚約発表したの、そのお相手がなんと神殿所属巫女のマリアージュ様！たぶん手を回したんでしょね、神殿側としても神殿巫女であるマリアージュ様が第1王子の婚約者となれば第1王子派に付かなきゃいけないと目論んだんでしょうけど。今の神官長は神殿巫女が第1王子の婚約者になろうが、神殿は中立の立場を維持するって発表したの。素敵よねベルゼフ神官長、もうちょつと若ければ狙ってたのに、残念だわ」

心底残念そうに告げるバルガス・・・レイスリーネは心の中で呟いた。

ベルゼフ神官長、良かったですね・・・もう少し若かったらバルガスさんに狙われる所でしたよ・・・

「ま、そんな感じで第1王子派は思惑通りに行かなくなったから水面下で神殿内部の人間に接触して何らかの手段で第1王子派に引きこうもと動いてるのよ」

「成程・・・」

ベルゼフ神官長は私にはそんな事一言も話さなかったからな・・・まあ、私は他神殿所属だし、ただの押しかけ客人だからこの神殿の内情など話すはずないか――・・・

「まあリーネちゃんはまだ見習だからそうそう巻き込まれることはないと思うけど

内部での両殿下派の対立は日に日に目に見えちゃうでしょうね・・・大変だろうけど頑張るのよ。

私ならいつでも相談に乗るから遊びに来てちょうだい」

レイスリーネはそっと溜息を吐いたのだった・・・

こくりと紅茶で喉を潤し、甘いケーキを頬張った――

「・・・リュカオン殿下はその勢力争いには入ってないんですね？」

両殿下の派閥から除外されているのならそんなに影響はないだろう、なによりもティアに火種が飛とぶようなら黙って見ているわけにはいかない・・・

「うーん、リュカオン殿下はぶっちゃけクラウドス殿下派ね」

「・・・うわ、マジですか」

ぎゅっと眉をひそめたレイスリーネ。

やはりどちらの派閥にも付かず係わらず、傍観者ってわけにはいかあー・・・

レリスリーネが複雑な表情を浮かべたことにバルガスは苦笑した。

「リュカ殿下はクラウドス殿下の事を慕ってるから、自ずとクラウドス殿下を支持するでしょうね。

リーネちゃんが危惧することは分かるわ・・・ティアちゃんに火の粉がかからないか心配なんでしょ？

まあ、その辺りはリュカ殿下が全力で守ると思うわよ。それにしても、リーネちゃんは友達思いね」

「ティアは私の一番の親友ですから」

私がいま、真っ直ぐ前を向いて歩いて行けるのはティアのおかげなんだもの・・・

ティアと出会えていなかったらいまの私はいなかったから――

天泣3

第3話

アステリオ神殿 神官長室

「ご友人とはお会いできましたか？」
「残念ながらまだです」

神官長室のソファにてちよこんと座るレイスリーネは溜息をつき答えたのだった。

あの日以来何度か足を運んだのだがどうにもタイミング悪くリュカオン殿下がティアを連れ去った後で・・・なんとも腹だたしい！そして自分の運の悪さにガツクリ・・・

バルンさん（バルガス）は私が来てることを知らせてくれると言ったがそれはお断りしただって突然現れてびっくりさせいんだもの・・・

・
「はぁー・・・」

ベルゼフは苦笑しながら紅茶をレイスリーネの前のテーブルの上に置いた。

その紅茶を手に取りこくりと喉を潤すとレイスリーネは紅茶の水面を見つめながら口を開いた。

「バルガスさんに聞いたんですが・・・神殿内部でも第1王子派、第2王子派の対立が始めてるらしいですね」

「・・・お恥ずかしい限りです」

「まあ王位継承権争いはどこの国でもあるものよね」

レイスリーネの言葉に苦笑いを浮かべながらも眉をひそめると大きなため息を吐いた。

「我が神殿の巫女、マリアージュが第1王子の婚約者に決まってしまった時は迷いました。

神殿の要である巫女が第1王子の婚約者となれば、神殿側は第1王子派になるのが妥当なのでしょうが神殿はどんな事があるろうと歴史上中立の立場を保ってきました。それを覆したとなると第1王子派がますます勢いを増してしまう可能性があります・・・」

「勢力を増す可能性があるって言うより確実にそれが目的でしょうね」

きっぱり告げたレイスリーネの言葉に苦笑しながらベルゼフは己の紅茶を飲みながら一息つき・・・

「マリアージュには立场上申し訳ないのですが、神殿は中立という

立場を維持することにしました」

「だけど、第1王子派はそれを良しとしなかったわけね・・・」

「ええ、神殿は取り込めなかったが内部の人間を多く自分たち派にしてしまえば神殿も自分たち側に付かなくてはいけなくなるだろうと・・・」

「ぶっちゃけた話、ベルゼフさんはどう思ってるんですか？」

「どう、とは？」

レイスリーネはベルゼフをじっと真正面から見据え問う。

そんな彼女にベルゼフは質問の意味を察すると渋い表情を浮かべ――
・・・

「これはあくまでも私個人の意見として受けとって欲しいのですが・・・私は第2王子クラウドス殿下の方が王に相応しいと感じました」

「そのクラ・・・」

レイスリーネが口を開きかけたとき室内をノックする音が聞こえベルゼフとレイスリーネは口を閉じ

「失礼します」と声をかけ入ってきた人物に目を向けた。入ってきたのは副神官長のロロットだった。

彼は神妙な面持ちで・・・

「談笑中申し訳ありません」

「どうしたんだね」

ベルゼフが問うとロロットは・・・

「オルフェルス殿下が神官長に面会を希望しております」
「・・・」

ロロットの言葉に眉をひそめたベルゼフ。そんな彼の様子を窺いながらレイスリーネは手に持っていた紅茶を飲みほすと立ち上がった。
・

「紅茶ごちそうさまです、お客様が来たのなら退散しますね」

「申し訳ありません。ロロット、レイスリーネ様を裏口の通路にご案内しなさい」

「わかりました」

レイスリーネに一礼するとロロットは「どうぞこちらです」と声をかけた。

レイスリーネはそれに従い室内を後にしたのだった――

ロロットの案内でオルフェルス王子とすれ違うことなく神殿中央区域から出たレイスリーネはあてもなくぶらぶらと中庭を歩いていると・・・

「はー、くそっ。オズの野郎少しくらいおおめに見てくれたっていいだろうに」

何処からか声が聞こえてきた。

レイスリーネは歩いていた足をぴたりと止め辺りを見渡す・・・が、自分の周囲に現在人影はない・・・眉をひそめ気のせいかと首をかしげた時なめ前にある木の枝が揺れる音がしレイスリーネは怪訝気に近寄った、そして上を見上げると――

「・・・あ」

「・・・あ、うおっ!？」

「っ!？あ、あぶなっ」

レイスリーネが見上げた先にいたのは同じ年くらいの青年だった。急に現れたレイスリーネの存在に彼も驚いたらしく、足を滑らせ木から落ちそうになったそれをレイスリーネは思わず両腕を突き出し受け取る姿勢をとった……。のだが青年は上手い具合に身体を駆使し地面へと無事着地した、すると勢いよく腕を突き出したままのレイスリーネに向って――

「おま、危ないだろうっ！ そんな細腕で男をキャッチ出来るわけねえだろ！」

「ああ！」

「ああって……」

「いや、うん。咄嗟だったからつい、でも私結構力持ちだし」

「そういう問題じゃねえよ……」

呆れた様子で溜息を吐いた青年。

「ていうか、木の上で何してたんですか？」

「何って、ちょっと逃亡中だったんだよ」

「お仕事サボったってクチですか、成程」

1人納得するレイスリーネに青年は微妙な表情を浮かべると問う。

「お前の方こそこんな時間に何してんだよ」

「へっ」

「お前見習神官だろ？ この時間だと見習は礼拝堂の掃除の時間だろ」
「……………」

青年の言葉にさっと目を逸らしたレイスリーネ。

それを見た青年はにやりと笑うとレイスリーネの右肩をポンと叩き・

・

「はは、なんだ俺とお仲間じゃん」
「うぐっ」

確かに今現在私は見習という立場にいる、だから見習いと同じ仕事を一応はこなしているのだが今日はベルゼフに呼ばれていたので仕事は免除されていたのだが、予定外のオルフェルス殿下の来訪で時間が余ってしまったのだ。

青年はにっこり微笑みながら・・・

「よし、じゃあサボり仲間としてちょっと付き合え」

「え、嫌だ」

「・・・嫌って」

即答したレイスリーネに目を瞬かせ彼女を見ろす青年。

レイスリーネはせっかく空いた時間なのだからティアに今度こそ会いに行きたいのだこの得体のしれない青年になどかまってなどいられない――

いっぽう青年はつれない返事を返す彼女に少々面白い物を見るかのように見下ろした。

「お前変わってんな」

「どういう意味ですか？」

青年の言葉に怪訝そうにすると、青年は己の前髪をかきあげ言う。

「いや、俺ってさ自分で言うのもなんだけど美青年だろ？って、何だよその顔」

「別に・・・」

絶対別について顔じゃねえだろ、おい・・・

レイスリーネは思いつき「なんだこの男」的な表情をしていたのだ。

青年はそつと溜息をつきながら話を続けた――

「まあこの容姿だから女を誘えば断れることはないんだよ、俺の誘いを即答断ったのはお前が初めてだぞ」

「それは光栄なことですね」

につこり微笑んで答えるレイスリーネに口元を引きつらせた青年。

「いい性格してるって言われるだろお前」

「いいえ、全然」

「・・・」

盛大な溜息を吐いた青年はふと何を思ったのかガシリとレイスリーネの右腕を掴む。

レイスリーネはギョツとして青年を見上げると何かを思いついたと言った表情を浮かべているではないか・・・

「な、何ですか」

「お前ならいいかもな」

1人納得する青年にますます怪訝そうに眉をひそめるレイスリーネ。

「俺の彼女と会って欲しいんだけど」

「はっ？」

「いや、こっち来てからまあ立場上とか色々・・・
女友達がなかなかできなくてさ。お前ならティアと気が合いそうだし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

いま、この人なんて言った？

ティア？ティアって言ったよねっ!？

ティアが彼女って・・・・・・・・・・

「あーーーーー!!!!!!!!!!!!!!っ!!!!!!?」

レイスリーネは左手で青年を指差し叫んだのだった――

天泣 4

第4話

至近距離で思いっきり叫ばれた事により顔をしかめのけ反った青年・

「っ、お前いきなりなんだよ！」

「こ、こいつがティアのっ……」

「はっ？」

眉をぎゅっとひそめたまま自分を見上げる少女に青年は怪訝そうに見下ろす。

レイスリーネは暫し青年を見つめた後盛大に溜息を吐いたのだった、その盛大な溜息を吐いた彼女に訳が分からないと言った表情を浮かべる青年――

「あー、自己紹介が遅れましたが。私、リーネって言います。ティアとは無二の親友です」

ティスリーネのいきなりの自己紹介に青年は一瞬止まったがその言葉の意味に気づき・・・

「リーネって、よくティアが話してた奴か！」

青年はレイスリーネを指差し告げる。

「ってか、指差すのやめてください」

「あ、悪い。てか、なんでここにいるんだよ・・・」

「そりゃあティアに会いに・・・と言うよりティアが恋人が出来たって手紙に書いてあったんでどんな野郎かと見に来たんです」

「どんな野郎って・・・」

呆れた表情の青年だがどこか面白そうに笑みを浮かべた。

「成程な」

「何が成程なんです？」

「まあ、気にすんな。それよりティアから聞いてるってことは俺の正体も知ってるんだよな？」

「第3王子のリュカオン殿下ですよ。でもティアの相手が王子だって知ったのは

こっちに来てからなんですよね・・・」

「なんだ、そうだったのか？」

「ええ、手紙にはそこまで書いてなかったの」

「ふうん。それよりティアはお前が来てること知ってるのか？」

「いえ、まだです。ってか、私が会いに行くたびに貴方が連れ去った後ばかりなんで会えてません」

お前のせいだこの野郎的な表情を隠しもしないレイスリーネにリュカオンは・・・

「ぶはっ！あははははっ！」

「ちょ、何んですか急に」

「いや、ぶはっ、お前良いね！」

ひーひー言いながら笑うリュカオンにレイスリーネは「なんだよ失礼な」てな表情を浮べるとそれを見たリュカオンはさらに笑った。リュカオンがひと通り笑い終わるとレイスリーネは胡乱気な眼差しで彼を見たのだった。

「悪い悪い。はー久々に笑ったぜ。」

よし、じゃあティアに会いに行こうぜ。俺もちょうどティアに会いに行くつもりだったんだ」

にこやかに笑い告げたリュカオンはがしつとレイスリーネの腕を掴み、引っ張って歩き出したのだった――

「殿下」

執務室で仕事をしていたクラウドは側近のトロワに声をかけられ書類から顔をあげた。

「先日の少女の事が分りました」

「そう、それで？」

「はい。どうやら彼女レーシア神殿より派遣された見習神官のリーネという少女です」

「レーシア神殿と言えば”水の都”ファーンイスか」

「はい。それに神官長が何かと目にかけているようですね」

「・・・」

「とりあえずは派閥争いには係わっていないようです」

「わかった、ありがとう」

「いえ、それとオルフェルス殿下が先ほど神殿に向かわれたようです」

「・・・」

クラウドは椅子から立ち上がり窓際に足を運び窓の外へと目を向けた。

「兄上も何をお考えなのか・・・下手に動けば動く程糸が絡まって行くだけなのに。俺が王位についての方が良いと思わせる事ばかりする・・・困った人だ」

ずっと目を剣呑に光らせ呟くように告げられた言葉。

側近のトロワはただ静かに主の言葉を受け止め・・・

「私は貴方がどんな選択を出そうとお仕え致します。もちろんフライングも同じ気持ちです」

側近の言葉にふっと口元を緩ませるクラウド。

窓の外の景色を眺めていたクラウドはふと視界にあるものを目に留めた――

「困った子だ、また執務から抜け出したみたいだね」

どこか苦笑した様子で呟かれた言葉、彼の視線の先にいるのは己の弟のリユカオンだった。

「・・・」

クラウドはリユカオンの後について歩く少女の姿が目にとまる。

そう、先ほど話題に出ていた神官見習いの少女リーネという少女だ・・・

「恋人が出来てからはお遊びは無くなったと思ったんだけど・・・」

リュカオンは宮廷医師バルガスが連れて来た少女と出会ってから今まで遊び歩いていたのをぴたりとやめ、彼女一筋へとなったと思っていたのだが・・・

クラウドは眉を下げやれやれと言った様子で眺めたのだった。

リュカオンに連れられティアのいる南塔の裏側にある小さな湖まで

来たレイスリーネ。

レイスリーネはティアの姿を見つけると小走りになり彼女の名を呼んだ。名を呼ばれた彼女は振り向き、その姿を目に留めると驚きに目を見張ったのだった。

「リーネっ!？」

「ティア！」

彼女に飛びつくように抱きついたリーネ。

「どうして、リーネが？」

「ふふっ、会いに来ちゃった」

「来るなら連絡くらいくれても良かったのに」

ティアはちよつと拗ねたような表情を浮かべたものの親友に会えて嬉しいのか笑みを浮かべている。

リーネもそんなティアに笑みを見せ小声で話す・・・

「手紙に書いてあったティアの恋人がまさか王子だなんて、びっくりだよ」

「ふふっ、私もびっくりだった。最初会ったときは王子だなんて知らなかったもの」

「そうなの？」

「うん。告白されてから告げられたの」

「・・・」

頬を染め心底嬉しそうに言葉を紡ぐ彼女・・・レイスリーネはなんだか面白くなくて

ティアをむぎゅっと抱きしめた――

「ああ、私のティアが悪い虫の毒牙につ」

悔しそうに唸るリーネにティアは苦笑したのだった。

「俺は虫はかよ」

リュカオンは困ったような表情を浮かべばやいた。

「それよりリーネ、その服って神殿仕えの衣装だけど・・・」

「そいつ見習のくせにいちよ前に仕事サボってたんだぜ」

「見習？」

眉をしかめたティア、まあそうだろう彼女は私の正体を知っているのだから。

私はティアに目くばせすると気付いたのかなぜ見習などしているのか問われることはなかった――

それから他愛もない話に華を咲かせ久々に楽しいひと時を過ごす事ができた、せっかくここに来たのだからもうしばらくこの国に滞在してティアと戯れようではないか。それと、このリュカオン王子が本当にティアを任せられる相手かどうかも見極めなきゃね！

天泣5

第5話

——遙か昔、この国に土の精霊王が加護を与えたことによりクローク王国は他の国よりも肥えた大地になり、豊穡の都と呼ばれるまになった。故にクローク王国が信仰するのは土の精霊王だ。土の精霊王おひざ元であるこの国にはやはり沢山の土の精霊が存在している。

神殿では各自食事当番制があり今日はリーネが野菜の仕込み係であった。

そんなリーネは調理場の外にある小影でジャガイモの皮をむいていたのだが何かとちょっかいをかけてくる存在がいた・・・

「・・・お願いだからやめてって。痛っ、ちょ、髪引っ張らない

でよ。ああこら！芋で遊ばないっ」

リーネの周囲をふよふよと飛ぶ小さな存在。

姿形はおぼろげではつきりとした輪郭はなくただ淡い光を放っている・・・今リーネの周囲を飛び交っているのは琥珀色の淡い光を放つ土の小精霊たちだ。属性によってその放つ色は違う、炎ならば赤、水ならば青、風は緑、光は金、闇は黒といった具合に色で判別することができる。

だがこの小精霊を誰も見ることができないわけではない、精霊の加護を受けた者、もしくは聖痕^{ステイグマ}を継承した者のみだ。私は後者に当たる、このアステリオ神殿内では神殿巫女であるマリアージュ、ルルナリナ、チェスカ、ジャステイーン、先代巫女であるベニアの5人が聖痕の継承者である。

「悪戯するなら手伝っ・・・あーーーーーっ」

文句を言うリーネの言葉の途中で小精霊達が人の気配を感じ一斉に姿を消してしまった

精霊達が遊んでいた宙を浮いたジャガイモ達はボトボトツと地面へと落っこち、ジャガイモがそこらじゅうに転がってしまう大惨事に・・・

なんてことしてくれたんだこの野郎、拾うの私じゃん！

しゃがんでジャガイモを拾おうと手を伸ばしたその時・・・

「リーネ！何をしているのですか！！」

「っ！？」

びっくりと肩を揺らし、おそろおそろ振り向くと般若のような表情のロジエツト神官が調理場の入口に立っていた。

「食べ物をするような扱いをするなんて言語道断です！どの様な理由があつてジャガイモをばら撒いたのかは分かりませんがジャガイモは食べ物ですよ！」

「いや、えと・・・」

私がやったんじゃありませんって言いたいけど言えない・・・言つてしまえばなぜ精霊が見えるのかと問われる、お忍びで滞在している私としては隠している身分がばれるのは良くない――

うぬぬ、最悪だ・・・

「リーネ、今夜の夕食は抜きです。どんな理由にしろ、食べ物をぞんざいに扱った罰です」

「えっ!？」

「返事は」

「あ・・・はい」

「ちゃんとジャガイモを洗ってから続きの仕込みにかかりなさい。

良いですね」

「はい」

ロジエツト神官はそう告げると踵を返し調理場の中へと戻っていったのだった。

なんともタイミング悪く発見されてしまったものだ、しかもよりもよってロジエツト神官に・・・他の神官の方ならこうも怒らないのだが彼女はとても神経質な人で神殿内でも有名だ。

「はぁ・・・ご飯抜き・・・」

がつくり肩を落とし、ジャガイモを拾い集めるリーネ。

『すまぬ、我が同胞たちが迷惑をかけてしまったようだな』

不意に聞こえた声。

右手でジャガイモを掴んだまま視線をあげるとそこにいたのは黄金色の毛並みをもつ一匹の狼――

「・・・地狼？」

『ああ、我は地狼。そなたは聖痕の継承者だな・・・』

黄金色の地狼は金色の目をスッと細めると、まるで見透かすようにリーネを見つめた。

そして――・・・

『ほお、”天泣”か・・・ソレを継承できるものがいたとはな』
「・・・」

地狼は土地属性の高位精霊――言葉を話すことができるってことはかなり高位に位置する精霊だ。

なにより私が持つ聖痕の称号を見抜くほどの・・・

だがなぜ高位精霊の地狼がここに？

『なぜ我がここにいるか疑問に思っているようだな。我は我が守護を与えた人の子がいる、その人の子がこの城内いるのでたまに散歩をしているのだ。今もその散歩中に小精霊達がやけに集まってる気配があつたので何かと覗きに來たのだが・・・どうやらそなたの仕事の邪魔をしていたようだ・・・すまぬ』

「あー、まあ悪気があつてやったわけじゃないので仕方無いです」

彼等はただ自分たちが見える相手に構って欲しくて小さな悪戯をするのだ、決して悪意があつてしたことではない。

『だがそなたの夕食が抜きにされてしまった』

「うつ・・・」

食事抜きはさすがにつらい・・・

地狼は暫し沈黙したのち言った。

『・・・うむ、夜神殿を抜けられるか？』

「え、まあ抜けられるけど・・・」

『それなら少々遅いが9時過ぎ頃に西塔にある温室に來い』

「西塔の温室？」

『ああ、場所がわからぬなら小精霊達に案内させよう』

「わかった。でもなんで？」

『我が主に頼んでそなたの夜食を用意してもらうのだ』

「えっ・・・私としてはありがたいけど、でもあなたのご主人様に悪くない？」

『かまわぬよ。我が主は心の狭い人間ではないからな』

「・・・そっか、じゃあお願いしても良い？」

『ああ。元々悪いの此方だ、そなたが遠慮することはない。では夜

にまた会おう』

地狼はそう告げると黄金色の毛並みを靡かせその場を立ち去ったのだった。

リーネが御飯が確保できたことに満面の笑みを浮かべた。

「それにしても地狼の主って誰だろ。

あの様子だと神殿所属の人ではなさそうだけど・・・まあ、いつか」

1人頷きジャガイモ拾いに戻ったリーネであった――――。

『我が主、クラウドス』

「ああ、お帰りグレン。今日はどこに散歩に行ってたんだい？」

バルコニーのテラスの椅子に座り本を読んでいた青年は気配なく現れた地狼に視線を向け微笑んだ。

『今日は神殿の方まで行って来た。面白い娘に会ったぞ』

「面白い娘？」

「ああ、聖痕を持つ者なのに神官見習をしている娘にな。ああそう
だ、すまないがその娘に夜食を用意してやってはくれぬか？」

読んでいた本を閉じ、地狼の言葉に怪訝そうに問い返したクラウドス。

「夜食？」

『我が同胞である小精霊達が少々悪戯をしたせいでその娘がとばかりを受け夕食を抜きにされてしまったのだ』

「・・・わかった、手配するよ」

『すまぬ』

「別にいいさそれくらい」

天泣6

第6話

地狼との約束通り夜9時過ぎごろ土の小精霊達の道案内で西塔にある温室へとたどり着いたのだがそこには思わぬ人物がいた――

ガラス張りの温室の中央部に置かれたテーブルとイス、そこに長い足を優雅に組んだ金色の髪の青年が座っていた。そしてその足元には地狼が座っていて・・・地狼は私に気づくと顔を上げ――

『来たか。どうした、そんな所で突っ立って。此方に来ると良い』

いや、うん・・・そこにはご飯があるから行きたいのだけど、だってなんで第2王子がそこにいるのっ!?

そう、椅子に腰掛けているのはクローク王国の第2王子クラウド。リユカオンの兄であるその人だ。

私の驚愕、というかなんとも言えぬ表情にクラウド王子は意味ありげに笑みを浮かべ呟いた。

「そう、君のことだったんだ」

「はい？」

クラウドは右手で頬づえをつき、面白そうに目を細め私を見る。

「こちらにおいで。お腹空いてるんだろう？」

「うっ」

「ほら、料理長が奮発して作ってくれたんだ」

バスケットの中身はふんだんに野菜を挟んだサンドイッチやローストビーフを挟んだサンドイッチにフルーツの盛り合わせなどが入っているではなか——リーネは「おおっ!？」と目を輝かせるとおのずとテーブルへと足を進める、そしてそれを見たクラウドは苦笑したのだった。

『ほら座れ、娘』

地狼が己の身体をつかいリーネのために椅子を引いた。

「ありがとう」

リーネの視線はもう目の前の王子のことよりも食べ物にいつている。そしてチラリとクラウドに視線を向け食べても良いのかと問うとクラウドは頷いた。頷いたのを確認したリーネはお肉を挟んだサンドイッチをまず最初に手を伸ばしぱくりと頬ばったのだった。

それを面白そうに眺めるクラウド。

「まず最初にお肉系からいくとはね・・・」

『肉からいくのは不味いのか?』

「いや悪くないよ。ただ年頃の女性は異性の前では見栄を張って控えるだろ」

『そういうものなのか？』

「俺の知る女性は、ね。がつつりお肉系から手をつける女の子なんて俺は初めて見たよ」

面白そうにクラウドはもくもくと食べるリーネを眺めたのだった。リーネには今の会話は食べるのに夢中で聞こえていないようだ、しかもその細い体によくそれだけ食べるものだと感心するほどの食欲だ。

『・・・よく、食べるな』

少々呆れ顔の地狼グレイ。

「そうだね。でも余計な見栄をはる女性よりありのままの姿を曝け出す方が俺は好感がもてるよ。貴族の女性達は俺に気に入られようと見栄をはる女性ばかりだからね。彼女みたいなタイプは新鮮だよ」
『ふむ、では我が主は肉食女性が好みということか・・・』
「・・・肉食女性・・・」

ちよつと想像してしまったクラウドは右手を額に当て口元を引きつらせたのだった――

『ん、どうした我が主？』

「グレイ、頼むから俺が肉食女性が好みだなんて表現で誰かに言うんじゃないぞ」

『なぜだ』

「・・・俺は別に肉を食らう女が好きなわけではないからだ」

俺が肉食女性が好きだなんて間違った情報が家臣たちに伝われば彼らは嬉々としてそういった女性を集め、早く伴侶を選べとせかしてくるに違いない・・・想像するだけでぞっとする。

俺の思いなど知らずこの地狼は言う。

『うむ、難しいな人間という生き物は。我は野性的な気の強いメスが好みだぞ』

牙を見せ人間ならば二ヤリと笑うと表現すべき表情でグレイはそう告げた。

そうか、と呟き苦笑したクラウド。そんな会話がなされているうちにリーネはどうやら食べ終えたらしく・・・

「ごちそうさまです」

「ああ・・・」

「なんですか？」

「いや、よく食べたねそれだけの量を」

クラウドの言葉にリーネは首を傾げながらまだ腹八分目ですよ、なんて告げるのだから流石にクラウドは笑顔を引きつらせる。リーネはナプキンで口元をふくと身を正し・・・

「ええと、夜食を用意して頂いてありがとうございましたクラウド殿下。」

後手になりましたが私、つい最近アステリオ神殿に来ました神殿見習のリーネと申します」

リーネの挨拶にクラウドは今までの穏やかな笑みを消し・・・

「1つ、質問してもいいかい」

「・・・はい、何でしょう」

質問しても良いかと問うたが、彼から発せられる雰囲気は答えろと言っている。

リーネは嫌な汗をかいた・・・穏やかそうな青年だと思っていたがやはり王族だ。表面上だけで判断するべき相手ではなかった。

目をスツと細めたクラウドはリーネをしつかり見据え――

「君は”水の都”ファーンニスにあるレーシア神殿に居たそうじゃないか」

「・・・」

どうして、この人・・・

「悪いけど、君のことを少し調べさせてもらったよ。俺はね、この城内の人間はほぼ把握しているつもりなんだ。君は初めて見る顔だったし、今現在俺と兄上での間で王位に関する話題が持ち上がったのを耳にしていると思うけど危険分子を見極める必要があるんだ」

「危険分子」

「そう、俺を亡きものとしようとする奴らとかのね、あとリュカオンを巻き込む愚かな奴らだ」

『ふん、我が主に手を出そうものなら我がただでは済まさぬ』

「心強い味方はいるけど、なるべく危険分子は早めに目を摘み取っておかなくていけない」

剣呑に目を光らせるクラウドにリーネは真っ向から見かえす。

「君がリュカオンと共にいたのを先日見かけたけれど・・・」

「それは私がリュカオン殿下をかどわかそうとしたとでも？」

「いや、その逆」

「は？」

「リュカオンは今でこそ1人の女性一筋だけど、少し前までは女遊びが激しくてね」

・・・なんですとっ！？

ガタンと椅子を倒し立ち上がった私にクラウド殿下は目を瞬かせ、私を見上げた。

「女遊びが激しいですって！ああ私のティアが女ったらしなんかにっ」

1人で勝手に憤るリーネに啞然とした表情のクラウド。

「君は、ティアという娘を知っているのかい」

「知ってるも何も私の親友です！ティアが恋人が出来たって便りがあったからどんな野郎かと拝みに来たらこの国の王じ・・・・・・あ」

思わず興奮して喋ってしまった・・・ひくりと口元を引きつらせ固まったリーネをクラウドは眺めたのち意味ありげに笑い。

「成程、友人のお相手を見に神殿見習などと偽り潜入したというところか」

「・・・・ど、どういう意味でしょうか」

「”聖痕”」

「っ」

しまった、それがあつたんだった・・・彼は地狼が守護を与えた主。地狼が喋っていないはずはなかった――

唇をぎゅっと噛みしめ、眉を寄せる。

クラウスは口もとに笑みを浮かべ問いかけた――

「聖痕”を継承した者が神官見習の地位にいるはずがない。与えられる位は巫女が妥当だろ？」

『いや、我が主よ。その娘が持つ聖痕は稀なるもの、故に継承できた者も何百年に1人という稀さだ。だから巫女よりも上の位を与えられているはずだ。そうだな娘？』

ああ、最悪だ・・・お忍びで来ただけなのに――

地狼という存在がいる以上誤魔化しは効かない。

リーネはそつと溜息を吐き、正式な礼儀作法でクラウス殿下の前に
跪き・・・

「私はファーンニス王国、レーシア神殿所属の”聖女”レイスリーネ・アニュラスと申します」

天泣6（後書き）

ようやくお相手となるべく彼と接触させることができました。
接触させるまでに時間かかりすぎですね・・・（苦笑）これからは
絡みが増えるはず・・・です。

天泣7

第7話

「私はファーンニス王国、レーシア神殿所属の”聖女”レイスリーネ・アニュラスと申します」

リーネが下げた頭をゆっくりあげると”聖女か・・・”と眩きが聞こえ、クラウドは呆れた表情でリーネを見た――

「これはまたとんでもない大物がお忍びで来訪したようだ」

「私個人的欲望で来たのでベルゼフ神官長には口止めしたんです」

「だが、よくレーシア神殿のものは君を外に出すことを許したな。

聖女の地位をつくる者は皆神殿からは出ないのが普通だが」

「ええと、置き手紙残して脱走してきました」

「・・・・・・・・・・」

クラウドはリーネの発言に眩暈を感じた。

この娘は今なんと言った？

脱走と言わなかっただろうか・・・

「脱走？」

「はい、脱走してきました。だって普通に言っても絶対神殿から出してもらえなさそうですし、出してもらえても手続きでやたら時間がかかるし護衛を付けられるわきと私の思うように行動させてもらえないでしょうから」

『とんでもないじゃじゃ馬だな』

地狼グレイも呆れたように呟いた。

「今頃ファーンニスは大騒ぎだろうな」

「・・・まあ、多分？」

視線を彷徨わせたリーネ。

一応自分のしたことについてのこの大きさはわかっているようだ・
・いや、わかっていながら行動に移してしまうなんて性質が悪すぎる――

クラウドは溜息を吐いた。

そんな彼にリーネはおずおずと少し気になったことがあった。

「あの・・」

「なんだ？」

「なんだか、少し口調が変わってないですか・・・？」

そう、私が身分をあかしてから彼の口調が少々変わった気が・・・先ほどまではどこか丁寧な口調だったのに今はなんだか少し砕けた？ ような・・・

「ああ、さっきまでののは外面ようだ」

「外面ようって・・・」

な、なんだそれは・・・

「立場上色々使い分けてるんだ。人の良さそうな雰囲気を出した方が色々やりやすい」

「・・・そ、そうですか。でも何で急に」

「君は立場的に俺と同等の地位になる”聖女”ならば。それなら普通に話した方が俺的に楽だ・・・正直

あの話し方は疲れるんだ。たまにぼろがでるしな」

「・・・」

「それよりレイスリーネ、君はなんて置き手紙を書いて来たんだ」

”ちょっと出かけてきます”って」

これはもう駄目だ・・・眩暈どころか倒れそうだ。

クローク王国まで来ていてちょっと出かけるレベルではないだろうに・・・

こめかみを押さえたクラウドは口もとを引きつらせながら告げる。

「今日はとりあえず遅いから神殿に戻れ、明日ベルゼフ神官長に事情を話してファーンイスと連絡を取る」

「えっ!？」

思いつき顔を顰めるリーネ。

「君がここにいることをファーニスに知らせるべきだ」

「ぐっ、それは・・・でも知られたら戻されるじゃないですか! 私はまだ戻るわけにはいかないんです!」

「君の目的は達成されただろう?」

「確かにティアの相手のリユカオン殿下には会いました・・・けれど、彼が女つたらしだと聞いてそんな人に私のティアを任せられるかどうかまだ確認できてません!」

・・・しまった、俺はどうやら余計な事を言ってしまったようだ――

深い溜息を吐くクラウド。

「グレイ、レイスリーネを神殿へ送ってくれ」

『わかった。行くぞ娘』

「・・・」

「レイスリーネ、まずは明日話をしよう。返事は?」

「・・・わかりました」

しぶしぶ頷いたリーネはグレイの後を追いついて温室を後にした。

残されたクラウドは椅子に腰をおろし冷めた紅茶を飲みほしたのだ
った――

温室を出て歩くリーネとグレイ――・・・

リーネは大きなため息をつき「あー、もうちょっといたかったのになあ」とぼやいた。

そんな彼女に地狼グレイは口を開いた。

『レイスリーネよ、我が主は話のわかる人間だ。此処に残りたいのならお願いすればよい』

「お、お願いって・・・」

『我が主は懐に入れた人間には優しい、お前はどうかやら我が主に気に入られたようだし聞き入れてくれるだろう』

「そんなに簡単にはいかなさそうだけど、あの人・・・」

『まあそれは否定できないが、主は気に入らない相手にはとことん本性はださず人の良い青年を演じる。要は自分のテリトリーには簡単には踏む込ませない人間だ。レイスリーネはそのテリトリーに入ることが許されたようだ』

「・・・なんで？」

眉をしかめ怪訝そうにする。

だって彼と話すのは先ほどが初めてだ、それなのに気に入られるような場面などあっただろうか・・・？

『肉を遠慮なく食らうそなたに好感を持ったそうだぞ』

「・・・・・・・・・・」

な、なんだそれは・・・

肉を遠慮なく食らうって、もしかしてローストビーフのサンドイッチのことだろうか？確かに一番に手をつけた。ってあんな分厚い肉をふんだんに挟んでるんだよ！？食べなきそんでしよう！

グレイは人間でいうと忍び笑いを浮かべ言った。

『何はともあれ、明日ちゃんと話をつけるべきだな』

「うー」

リーネは盛大溜息を吐いたのだった――

天泣7（後書き）

クラウドススの口調の変化・・・なんだか微妙にわかりにくいかも、
です（汗）

天泣 8

第8話

レイスリーネはベルゼフに自分が置き手紙を残し、レーシア神殿を抜け出して来た事を告げるとベルゼフ神官長は声にならない悲鳴をあげたのだった・・・

まあそれはそうだろう、”聖女””巫女”は国にとって王子、姫と同等の価値がある存在なのだ。その存在が置き手紙を残して勝手に国外へと供をも付けずに出たとなれば、それはもう大事だ・・・ベルゼフは大慌てでレーシア神殿へ連絡するための手続きにかかったのだった――

そしてそれから数日後――

「うわっ、最悪・・・」

レーシア神殿より使者が来たと知らせがありレイスリーネは神官長室へと訪れたのだが部屋に入るなりとある人物を見て思わず声を漏らしたレイスリーネ。

その発言に眉を吊り上げたのはソファに腰かけていた上質な神官服を身にまとった12〜13歳位の少年であった。

彼はギロリとレイスリーネを睨むと――・・・

「何が最悪だ、この大馬鹿者めが！？まったくエメラルダといいお前といいどうしてこうも次から次へと問大ばかり起こすのだ！少しは大人しくしておれぬのか！」

「顔真っ赤ですよリーヴェ様」

「だ・れ・の・せいだと思っておるのだ！」

「・・・私？」

ひくりと口元を引きつらせるリーヴェと呼ばれた少年。

年齢に見合わぬ話し方をする彼の米神には青筋が数本立っていた・・
・そして彼が再度言葉を発しようとしたとき神官長室をノックする音が聞こえたので口を噤んだ。

ベルゼフ神官長が扉をあけるとそこにはクラウドとグレイの姿があった。

「これはクラウド殿下」

「レーシア神殿より使者がきたと聞いたので」

クラウドがそう告げると室内へと促した。
そしてソファに座る1人の少年に目を留める――
同じように入ってきた地狼を連れだした青年を見るリーヴェ。

「ほお、地狼か・・・」

リーヴェは目を細め面白そうに言った。

地狼はじつとリーヴェを見かえすと感嘆の声をあげた。

『これはまた・・・』

「ふむ、私の称号を見抜くとはお主なかなか位が高いようだな」

『成程、そなたがレイスリーネの師というわけか。そなた程の者ではなければレイスリーネの力を抑えることは出来ぬだろうな』

「そこまで見抜くか、地狼よ」

お互いの力量を探りあっている雰囲気がある1人と一匹。

いったん話の区切りがつくとベルゼフ神官長が自己紹介をした。

「クラウド殿下、此方のお方はレーシア神殿の”神官長”であるリーヴェ殿です。そしてリーヴェ殿こちらの青年は我がクローク王国の第2王子クラウド殿下です」

「ふむ。なかなかの美男子だな、だが私には及ばぬな！」

はっはっはっ！とこれもまた少年らしからぬ笑い方をするリーヴェ。
クラウドは表情は崩さなかったが少々戸惑ったように視線をリーネへと向けた、視線を受けたリーネは・・・

「ああ、リーヴェ様って外見は子供ですけど中身はおっさん・・・
いや、もうお爺さん？なんですよ」

「こら、ぴちぴちの私に向かつお爺さんとはなんだ！」

「え、だって実際そうじゃないですか」

「うぬっ。確かに私はベルゼフより年上だがな」

リーヴェの言葉に目を見開くクラウド。

ベルゼフは50代半ばだ、それより年上だと――？

『我が主よ。強大な力を持つ”聖痕”はときに人の毒となる、人の容量を超える”力”を持つということはそれなりの代償支払わねばならない・・・それが自然の道理だ』

「代償？」

眉をひそめたクラウドにどこか悲しげにリーヴェは言う。

「愚かな人間は力の強い”聖痕”、稀なる”聖痕”を手に入れたがる。本当に愚かな事だ、何も知らずその”聖痕”を手にしようとする。そして継承者に支払う代償なども知りもせずにな・・・。私が支払った代償は”成長”だ。聖痕を継承してからずっとこの姿のままだ」

どこか重たい空気が室内に流れた、クラウドはふと思いついた・・・。グレイがレイスリーネの持つ”聖痕”を稀なる”聖痕”と・・・視線をリーネへと向けると彼女は憂いを帯びた眼差しをしていた。

ぎゅっとその瞼を閉じ、何かから耐える様に――

リーネを見る主に気づいた地狼グレイは・・・

『レイスリーネの持つ”聖痕”も稀なるもの、故にその代償を支払っているはずだ』

グレイの言葉にびくりと肩を揺らしたレイスリーネ・・・

「地狼よ、それ以上問うな。レイスリーネが支払った代償はとても大きなモノだったのだ・・・そのことには触れないでやってくれぬか」

『ふむ、すまぬ』

「まあ、大き過ぎる力には毒だという事だよ」

苦笑して告げるリーヴェ。

重たい空気を払うかのようにリーヴェは続けて言った――

「ベルゼフよ。私も暫く此方に滞在するので宜しく頼むぞ」

突如言われた言葉にベルゼフ神官長とクラウドは一瞬固まった。

「っていうか、良いんですか？リーヴェ様神官長なのに・・・」

「問題ない、うちには優秀な副神官長がおるだろう、あ奴に任せとおけば問題ない。」

私も少し休息が欲しかったからな、ちょうど良い機会だ」

「なんかいつもレベ副神官長がリーヴェ様の尻拭いしてますよね。きっと今頃泣いてますよ・・・」

「ふん、あ奴はそういう星の定めに生まれてきたのだ」

「・・・それはリーヴェ様がそう勝手に解釈しているだけじゃないですか」

「・・・」

「・・・」

そんな2人のやり取りを聞くベルゼフとクラウドスは互いに顔を見合せ、頭を悩ませたのだった――

脱走した自国の聖女を迎えに来たのかと思えば迎えにきた本人も仕事をさぼって此方に滞在すると言いだしたのだ・・・頭が痛くならない筈がない――

なんせ相手はレーシア神殿の神官長と聖女なのだから・・・

天泣9

第9話

「うふふっ、た〜んと食べて大きくなるのよ」

「・・・」

両手で頬づえをつきながらうつとりした様子でリーヴェ様を見つめるバルンさん・・・

対するリーヴェ様はもうドン引きだ、思いっきり顔が引きつっている。

現在私とリーヴェ様はバルンさんとティータイム中です。

リーヴェ様も暫くアステリオに滞在することになったのだが、彼はやはり自由に動きたいとのことで身分を偽ることにしたのだ、私と同じ神官見習いとして……。ベルゼフさんは最初猛反対だったが本人が面白そうだから構わないという事で現在に至るわけだ。

「あぁん、可愛いわぁ〜。食べちゃいたい」

先ほどからバルンさんはリーヴェ様がツボにハマっているらしく熱い視線を送っている。

リーヴェ様は確かに美少年だ、中身はお爺さんなのだが――

「わ、私は食べても美味しくないぞ」

「んふ、照れちゃって可愛いんだからっ」

バルンさんは人差し指でリーヴェ様の額をツンと押した……そう、よく恋人同士が戯れるかのように。

「……………」

ピシリと固まったリーヴェ。

レイスリーネはそんな2人のやりとりを見ながらケーキを頬張っていたのだが意識をとり戻したリーヴェによって思いっきり机の下でレイスリーネの足を踏みつけられたのだった。

「痛っ!？」

足を踏んできたリーヴェを見るとものすごい表情で睨んできているではないか、そして小声で――

「リーネ、助けぬか!」

「えー、めんどくさ……痛っ!？リーヴェ様、足踏むのやめて下さいよ」

「ふん!おぬしが助けぬからだ。というよりもなんなんだあの生き物は!」

「生き物って……さすがに酷くないですかリーヴェ様」

「仕方無かろう!男のくせに気持悪い話し方をしておって」

「まあオカマさんですから……」

「・・・オカマ、とはなんだ？」

「あれ、リーベ様知らないんですか？」

「知らぬ」

「ええと、オカマとは身体は男性だけど心は女性で」

「なんだそれは」

「ふふ、私の事が知りたいのかしら？」

こそこそと話していた私達にバルンさんは机から見を乗り出しにっこり微笑んでいた・・・視線を戻したリーヴェは至近距離にバルンの顔があった事に声にならぬ悲鳴をあげたのだった。

「――っ！？ち、近いぞ、お主！身を乗り出すでない！」

「焦った顔も可愛わぁ。それにその喋り方がまたツボよねー」

野太い声でしかも身体をくねらせながら喋るバルン・・・突然リーヴェはガタリと椅子から立ち上がると無理やりレイスリーネの腕を掴んだ。

その彼の表情はもう完全に引きつっていた・・・どうやら未知の生物との接触は刺激が強かったようだ。

「ちょ、まだケーキがっ」

「意地汚いぞリーネ！私はもう帰る！」

「あら、帰っちゃうの？ふふっ、またいつでもいらっしやい私は大歓迎よ」

「二度と来るか！」

吐き捨てる様に言い部屋を出て行くリーヴェ、そしてリーヴェに引きずられる状態で去ってゆくレイスリーネ。2人を見送るバルンがふと何かを思い出しように慌ててレイスリーネを呼びとめた。

「リーネ」

「はい？ ちょ、腕引っ張るのやめて下さい」

レイスリーネは扉につかまり己を引っ張るリーヴェの行く手を阻んだ。

「えと、なんですかバルンさん」

「リーネはティアの親友よね？」

「もちろんです」

頷いたレイスリーネにバルンはどこか神妙な面立ちで問う。

「ティアが薬草に詳しいのは知ってるわよね？」

「はい、知ってますがそれがどうかしたんですか？」

「じゃあ・・・毒草に詳しいことも？」

バルンは真剣な眼差しでレイスリーネを見つめ言った。

レイスリーネは一瞬眉をひそめた、もちろんティアが毒草に詳しいのは知っている。

そして何より、毒物を調査する技術も持ち合わせていることも・・・

「知ってます」

レイスリーネの返答にバルンは苦い表情で・・・

「ティアが何故あんなにも毒草に詳しいのか、リーネは知ってる？」

「何故ですか？」

何故それをバルンさんは聞く――？

「・・・」

「どうしてそんな事を聞くんですか？」

真っすぐバルンを見つめ強い意志のこもった瞳で問い返したレイスリーネにバルンは戸惑った表情を浮べた、そして暫しの沈黙後・・・

「いいえ、ごめんなさい。なんでもないわ、忘れてちょうだい」

首を振り、言葉を濁しそう言った。

そんなバルンを探るようにレイスリーネは見たが彼は先ほどまでの神妙な表情から笑みを浮かべると――

「美味しいお菓子また用意しておくから息抜きがてら遊びにいらしやいね」

そう告げたのだった。

レイスリーネはバルンがなぜそのティアの毒草知識について聞いてきたのか気になったがその場を後にしたのだった。

「バルンさんはどうしてあんなことを聞いて来たんでしょうか？」
「知らぬ、だが・・・何やら意味ありげではあったな」
「・・・」

いいような不安が過る。
ティアが毒草に詳しく、そして毒の調合に長けている理由は知っている。決して本人が望んで手に入れた知識でも技量でもない・・・
覚えざる得なかったのだ。

そう、あの組織の中では――

「それ以上唇を噛むな、血が出るぞ」

無意識に唇を噛みしめていた私にリーヴェは諭すように告げる。

「考えても仕方なからう。何かあれば本人が助けを求めてくるはずだ」

「そう、ですよね」

「うむ・・・ん」

「どうしたんですかリーヴェ様？」

ふと言葉を止めたリーヴェが前方を見つめ足を止めた。
同じように足を止めリーヴェと同じ方向を見ると・・・そこに居たのは――

「クラウド殿下とマリアージュさん？」

「ああ此処の神殿巫女か」

遠目から見る限りでは親しげに話す2人の姿。

クラウドを見るマリアージュの表情にリーネは目を瞬かせた――

あれ？なんか・・・

「うむ、あの娘。どうやらクラウドに惚れておるな」

「あ、やっぱりリーヴェ様もそう思いました？」

そうなのだ、クラウドを熱のこもった瞳で見上げているのだ。

クラウドの方は特にそんな感じはないのだが、マリアージュのあれはどう見ても恋する乙女・・・

「マリアージュさんて第1王子の婚約者になったはずなんですけど」

「そうなのか？」

「はい。いったいどういう・・・」

「まあ政略的なものなら本人の意思など関係などなく決められるだろうな、道具として」

「・・・」

――”道具”・・・嫌な響きだ。

嫌な事を思い出す・・・昔は自分も道具として扱われていたと思う

とゾツとする。

「む、話は終わったみたいだな」

「えっ」

暗い思考から意識を戻すとクラウドスはマリアージュから背を向け此方に歩いてきていた。

彼は私達の姿を見ると口元に笑みを浮べた――

「色男はなかなか辛いなクラウドスよ」

リーヴェの言葉に一瞬目を瞬かせたクラウドスはすぐに苦笑して「気づきましたか？」と言った。

「ふん、あの娘があんな顔しておればお主に惚れている事くらいわかるであろう」

「でしょうね」

溜息を吐くクラウドスにレイスリーネは思ったこと問いかけてみた。

「マリアージュさんは望んでオルフェルス殿下の婚約者になったわけじゃないんですよね？」

「ああ、彼女の父親が兄上派の人間なんだ。だから己の娘を己の慾のために差し出した、そして兄上の方も巫女である彼女の価値を利用しようとした」

マリアージュさんの意志など関係なく・・・そんなのは酷い。

「彼女はクラウドス殿下が好きなんですよね」

「そうみたいだね」

まるで他人事のように答えるクラウド、そんな彼に少々眉をひそめながらも言葉を続けたレイスリーネ。

「どうにか、出来ないんですか？」

「どうにか、とは？」

「えっ、えと。国王陛下に彼女がオルフェルス殿下が好きじゃないからと・・・」

「彼女は俺が好きだから婚約を破棄させろとでも？」

スッと目を細め自分を見下ろすクラウド。

「レイスリーネ、俺はそれほど優しい人間じゃない。確かに彼女は不憫だとは思う、だが俺がもしソレについて口だしすれば兄上の婚約者を奪った弟となる、奪った俺は当然彼女の婚約者にならねばならない。彼女は穏やかな性格だし人柄も良い、だが俺にとってはそれだけの存在でしかない。彼女がどんなに俺を思おうが、俺はそれに答える気はない。妻にむかえても彼女が傷つくだけだ、中途半端な優しさは時に残酷だ」

「・・・」

「リーネ、哀れむ気持はわかるが双方の気持ちを通じてこそ上手くいくものだ」

諭すように告げるリーヴェ

「ごめんなさい、軽はずみな発言だったわ・・・」

しゅんとなるレイスリーネにクラウドは前髪をかきあげなら苦笑した。

「俺は順応な女性は好みではないんだ、一緒にいても面白くないだろう?」

いや、なんで私に振るのよ・・・しかも面白くないってなによ。

「ほお、クラウドはどのような女子が好みなのだ?」

「一緒にいて退屈しない子かな。あと少々お転婆でも手綱を握る自信はあるからそういった調教のしがいがありそうな娘がいいかな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・調教のしがいがあるって、動物じゃないんだからさ。
クラウド殿下ってちょっとヤバくない?

「ふむ、ではリーネなどどうだ?調教のしがいがありそうだろに?」

ちょっとー!リーヴェ様なに言っちゃってるんですかあ!?

口もとを引きつらせたレイスリーネをにやりと笑いながらクラウドは・・・

「確かに調教のしがいがありそうだな」

面白そうにレイスリーネを見るクラウドにレイスリーネはサッと視線を逸らす。

「ふふっ、俺に調教されて見るかい?」

「お、お断りします!私は誰にも手なづけられるつもりはありませんので!」

完全に引け腰体制のレイスリーネを面白がってクラウドは声音に艶やかさを含めスツと目を細め、怪しげに微笑み告げる。

「・・・へえ、じゃあますます調教したくなってきたな」

「―っ」

色気のある声音にその妖艶な微笑みにさすがにレイスリーネは顔を真っ赤にした。

まあそうだろう、なんといっても顔はリーヴェも褒めるほど美青年なのだからどんな女性もその妖艶な笑みを目撃すれば顔を赤くしない方がおかしいくらいだ。

そんな彼女の様子を見ていたリーヴェは苦笑してレイスリーネに助けを入れたのだった。

「クラウドよ、それくらいにしてやれ。あまりそちら方面に免疫がないからな、ほれみろゆでダコのようにではないか」

「確かにゆでダコだな・・・」

2人は顔を見合わせ苦笑したのだった――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2500k/>

天泣の聖女

2010年10月10日11時14分発行